

9. 本  
9. 本

をいさぐのこと  
はニホひサ  
書いそ。

は

3 指書

栄三あといさん

4 指書

いん神楽ス郎

吉田栄三に訊書。

栄三の役々。

神カザ。

花の下の歌。

を  
ち  
い  
さん  
の  
こと  
を  
思  
ふ  
出  
ち  
と  
い  
ま  
び  
も  
胸  
に  
シ

始	交	綴	糸	へ	然	る	三	糸	一
め	際	宛	の	ら	し	称	と	の	ニ
は	、	山	稱	水	そ	心	親	風	と
と	て	な	に	な	れ	。	交	か	飛
水	み	人	こ	い	は		か	い	下
程	、	を	如	もの	理		み	言	も
に	う	好	ハ	の	密		、	。	の
思	ち	む	ツ	が	い		二	か	か
は	に	や	を	み			と	み	み
ぬ	疎	。	持	子	物		か	。	。
う	撮		た	。	事		不		
ち	に		ぬ	物	は		思		
ひ	な	性	の	は	理		議		
ひ	了	質	人	陰	盡	詰	心		
	人		間	陽	め		。		
	も		は	ハ	い		言		
	あ		又	あ	は		み		
	ま		別	。	か		人		
	し		に	。	り		も		
					為		め		
親									
一									
才									
が									

増して来る者もみ了。

合縁寄縁とよし言わが和と深直とは合くそ

水だ。嶺人同士に好さ合ふ人こそ可か一寸

うザラに ~~はみりしんあなりのた。~~

和と文士郎と人と怒意にちり方か当知のわら

に世習の思わらしいか ホツとセウシヤン 實際は文士郎と人

の方がおおいりさんよりは古く知 ル た。

浪花女で其居にすることになり寛千ヤとの

肝力りて、津太夫師匠と文五郎さんには團平

越路一土撮の二とと訊いなり。又 ヤ 文五郎



五との思子

格子ま子まのま麻ま

のま水ま人まかま掛まけまてまあまひまのま

暎し簾しのし下しにし茶し三しのし膝しがし見してしあしるし

一し度し金しのし後しをしいしるしでし何しれしなししし声しをしかしけし

身し由し行しえしししてしあしるしちしにしわしんし私しはし淡しんしとし

ししをし得したしあしらしるしにし懸したし水しはしわしるしのしでしあしるし

付し合しつしばし口しにしあしひし経し味しのしあしるし人しがしとし思しいしるし

私しはし頃しかしらしのし癖しでししし年し長しのし人しのしあしらしるし又しすし

面しのし遠しくし先し非し筆し又し知し合しのし人しのし話しをしいしてしあしらしるし又しすし

にしなしるしとし思しいしるし必しずしにしししにし上しにしあしらしるし入しれしるし碧し

~~性~~ 加子。

たへ 逢願が定まらぬに  
隔の境は自然

にとれと云え。

物に虚が有く、  
室直で  
潔癖、  
そと正しく物

を判断す。  
そと  
独断力の強  
い  
尊敬に

價する人  
と  
思  
え  
記憶力に富み

そと  
常識家  
と  
い  
稱  
高  
真  
の  
等  
い  
性

格  
者  
は  
字  
ば  
ね  
ば  
な  
ら  
ぬ  
語  
人  
と  
思  
ふ  
と  
其  
の  
意  
文  
景

加好子  
にならぬ

正直言ふと  
菜三  
加好子  
にならぬ  
の  
は  
会  
子  
日

か<sup>増す</sup>澁<sup>す</sup>い<sup>す</sup>す。に口<sup>へ</sup>れ<sup>て</sup>す<sup>り</sup>かり<sup>に</sup>は<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>い<sup>い</sup>

さん<sup>に</sup>惚<sup>れ</sup>た<sup>の</sup>ひ<sup>あ</sup>る。

現在<sup>に</sup>も<sup>あ</sup>い<sup>好</sup>む<sup>な</sup>あ<sup>な</sup>い<sup>は</sup>画<sup>い</sup>。

栄<sup>三</sup>に<sup>惚</sup>れ<sup>て</sup>か<sup>う</sup>文<sup>楽</sup>加<sup>画</sup>悦<sup>は</sup>好<sup>む</sup>に<sup>あ</sup>る。

若<sup>し</sup>私<sup>が</sup>栄<sup>三</sup>に<sup>惚</sup>れ<sup>た</sup>か<sup>ら</sup>文<sup>楽</sup>加<sup>画</sup>悦<sup>は</sup>好<sup>む</sup>に<sup>あ</sup>る。

病<sup>者</sup>名<sup>に</sup>は<sup>あ</sup>ら<sup>な</sup>か<sup>ら</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>い</sup>思<sup>ひ</sup>。

その<sup>証</sup>據<sup>に</sup>あ<sup>ら</sup>な<sup>い</sup>か<sup>ら</sup>文<sup>楽</sup>を

認<sup>め</sup>ら<sup>な</sup>い。

弁<sup>論</sup>。右<sup>の</sup>太<sup>天</sup>の<sup>近</sup>頃<sup>の</sup>風<sup>格</sup>は<sup>慕</sup>い<sup>て</sup>あ<sup>ら</sup>し

又<sup>も</sup>五<sup>郎</sup>と<sup>あ</sup>る<sup>の</sup>感<sup>心</sup>し<sup>て</sup>居<sup>る</sup>。





中にも遺品は、この二人所演の道明子と

二月堂の印象は私の生涯を通じて忘れぬこと

の出来ぬ神品なと思ふ。

私は父と觀た初は必すその演物おしものの演出と

第三から訊しことしとみす。東京からせ

伊豆館（一）吾輩の大部屋へ泊る事があ

りた）私の家が一時必す四五日は泊る。

去るなり栄三の家。訖れ藝士の二人は酔潰

れて出銚の向前に倒れ、こどももあいた。

る。

宗三  
か  
訊書  
し  
た  
一  
十  
冊  
程  
み  
た  
等  
に

が  
柳  
お  
し  
の  
家  
が  
戦  
火  
に  
遭  
ひ  
た  
為  
り  
焼  
り  
し

ま  
い  
現  
在  
年  
許  
に  
三  
四  
冊  
一  
か  
残  
り  
な  
い。

そ  
れ  
で  
も  
い  
ち  
や  
う  
お  
い  
い  
こ  
ん  
に  
訊  
ひ  
た  
際  
は

頭  
の  
中  
に  
生  
き  
て  
居  
る。

栄  
三  
は  
不  
思  
議  
と  
知  
り  
母  
と  
仲  
好  
し  
ひ  
み  
た

母  
は  
彼  
を  
お  
じ  
い  
さ  
ん  
と  
言  
ひ  
て  
居  
り  
ま  
す  
知  
共

道  
知  
ら  
ず  
し  
の  
ち  
に  
お  
い  
い  
さ  
ん  
と  
叙  
ぶ  
や  
う

に  
な  
い  
た。

2) <sup>私</sup>は

あ、いりさん  
と、~~の~~ <sup>も</sup>好<sup>い</sup>い  
に、~~は~~ <sup>あ</sup>が  
又、<sup>あ</sup>君<sup>の</sup> <sup>あ</sup>様<sup>さ</sup>

人も <sup>あ</sup>り <sup>な</sup>い  
程 <sup>あ</sup>い <sup>な</sup>い  
程 <sup>あ</sup>い <sup>な</sup>い

三、の、<sup>あ</sup>い、<sup>な</sup>い  
程 <sup>あ</sup>い <sup>な</sup>い  
一、<sup>あ</sup>い <sup>な</sup>い

が、<sup>あ</sup>い <sup>な</sup>い  
程 <sup>あ</sup>い <sup>な</sup>い  
程 <sup>あ</sup>い <sup>な</sup>い

あ、<sup>あ</sup>い <sup>な</sup>い  
程 <sup>あ</sup>い <sup>な</sup>い  
程 <sup>あ</sup>い <sup>な</sup>い

あ、<sup>あ</sup>い <sup>な</sup>い  
程 <sup>あ</sup>い <sup>な</sup>い  
程 <sup>あ</sup>い <sup>な</sup>い

あ、<sup>あ</sup>い <sup>な</sup>い  
程 <sup>あ</sup>い <sup>な</sup>い  
程 <sup>あ</sup>い <sup>な</sup>い

あ、<sup>あ</sup>い <sup>な</sup>い  
程 <sup>あ</sup>い <sup>な</sup>い  
程 <sup>あ</sup>い <sup>な</sup>い

あ、<sup>あ</sup>い <sup>な</sup>い  
程 <sup>あ</sup>い <sup>な</sup>い  
程 <sup>あ</sup>い <sup>な</sup>い

あ、<sup>あ</sup>い <sup>な</sup>い  
程 <sup>あ</sup>い <sup>な</sup>い  
程 <sup>あ</sup>い <sup>な</sup>い

杖んすかり。 ( ) 宗三の因 ( ) 留められ ( ) 居の ( ) おし

い ( ) さん ( ) 内密 ( ) 中座へ ( ) 未 ( ) 事 ( ) が ( ) ぬ ( ) 。

承 ( ) は ( ) い ( ) ま ( ) り ( ) も ( ) 。

る ( ) の ( ) な ( ) 。

承 ( ) は ( ) 何 ( ) 時 ( ) も ( ) お ( ) し ( ) い ( ) さん ( ) と ( ) 二 ( ) 人 ( ) で ( ) お ( ) は ( ) り ( ) さん

の ( ) 破 ( ) 管 ( ) で ( ) 教 ( ) じ ( ) る ( ) 。

一 ( ) 居 ( ) る ( ) 人 ( ) の ( ) な ( ) 。

お ( ) は ( ) り ( ) さん ( ) が ( ) 臥 ( ) 込 ( ) る ( ) 。

時 ( ) は ( ) 必 ( ) ず ( ) 何 ( ) 時 ( ) も ( ) お ( ) し ( ) い ( ) さん ( ) の ( ) 手 ( ) 料 ( ) 理 ( ) が ( ) 。

れ ( ) が ( ) 実 ( ) に ( ) ま ( ) か ( ) り ( ) の ( ) な ( ) 。

一いついまでは心残りは、此後にはわろしき事いふが

何時もその方に心を奪はれる為め、あいつ

さくとあはアさんとの別懐<sup>初め</sup>を考かすにしま

誰まかりて居ない、そんなこと、追ふは考こす

とはして居たのが、何時も話加<sup>あつ</sup>の方へは

かり傾<sup>かたむ</sup>りてしまつて、人間は常に訊<sup>き</sup>く漢<sup>えん</sup>し

のが遺憾<sup>いんげん</sup>を。

敷い一人とは、あはアさんを三月十三日の大

阪空襲の初、乳母車に乗せ埴<sup>は</sup>の<sup>か</sup>の<sup>う</sup>高島屋の地

下室 脱<sup>逃</sup> 加火 其処が危しな<sup>い</sup> 女 一室ん

谷町六丁目 鈴石病院に逃<sup>け</sup> 三日 二<sup>り</sup> 収

容<sup>さ</sup> 火<sup>て</sup> 為<sup>す</sup> うち、その院長が山三夫妻と知

って大事にして是れをさうな。

あ、何て人の実家は、京都の柳馬場<sup>の</sup> 女<sup>の</sup> び

その実家から迎<sup>い</sup> 込みの看加<sup>へ</sup> 来<sup>て</sup>、弟子の光造が

リヤカーに乗せて送<sup>ら</sup> せ、火を見送<sup>ら</sup> して栄

三は、大知<sup>の</sup> 水<sup>の</sup> 村<sup>の</sup> 後<sup>の</sup> 捜<sup>索</sup> 者<sup>の</sup> もとへ身<sup>を</sup> 送<sup>り</sup> せ

たのい<sup>ひ</sup> 女<sup>の</sup> ~~が~~

大沼<sup>の</sup> 金<sup>の</sup> 市<sup>の</sup> 焼<sup>上</sup> と他<sup>の</sup> した、燦<sup>然</sup> 原<sup>の</sup> び<sup>の</sup> 乙<sup>の</sup> 夫<sup>の</sup> 婦<sup>の</sup> は

この世の別れを  
一たび  
張か  
た。

問も  
魚し  
お  
秘  
人  
は  
病  
改  
ま  
て  
実  
家  
の  
息  
を  
引

取  
ら  
た。

~~糸~~  
程  
速  
こ  
小  
泉  
村  
に  
積  
不  
の  
折  
れ  
了  
不  
知  
れ  
死

人  
の  
一  
ま  
い  
た。

酒  
の  
好  
き  
な  
ほ  
か  
は  
全  
く  
養  
生  
家  
に  
は  
一  
と  
不  
攝

生  
な  
二  
と  
も  
一  
な  
か  
口  
に  
人  
の  
口  
に  
か  
槽  
石  
の  
さ

戦  
争  
の  
様  
相  
と  
な  
り  
た  
強  
心  
み  
了  
。 戦  
争  
の  
孫  
酒  
酌  
な

影  
響  
は  
不  
出  
の  
名  
人  
に  
。 臨  
足  
な  
染  
養  
を  
入  
な  
か

口  
に  
。

私はいまでも  
女の温顔を  
よめよ  
こと  
か  
出  
来  
な

私に對する

い  
私  
妹  
の  
花  
井  
儀  
に  
傍  
か  
の  
ま  
違  
い  
い  
間  
に  
合  
は  
な

か  
り  
を  
の  
で  
祥  
月  
の  
日  
三  
つ  
寺  
で

あ  
い  
い  
さ  
ん  
と  
あ  
は  
ら  
さ  
ん  
の  
供  
養  
を  
手  
向  
け

此二細かな  
な  
ほ  
愛  
を  
し  
を

あ  
い  
い  
さ  
ん  
に  
訊  
い  
た  
話  
を  
一  
と  
ま  
と  
め  
に  
し  
も  
近

し  
「  
人  
形  
符  
者  
と  
言  
ふ  
文  
泉  
手  
記  
を  
著  
す  
」  
と  
し

て  
お  
う  
そ  
し  
こ  
故  
人  
の  
靈  
に  
献  
ず  
る  
為  
に  
尾

う  
わ  
が  
そ  
の  
に  
し  
て  
も  
近  
く  
天  
由  
三  
階  
下  
か  
文  
泉



と即座に  
なすと  
通信と  
見ん

~~何れ~~ 一人の  
支那元  
了り  
曰と  
彼の  
信

めら  
え  
て  
な  
か  
右  
不  
運  
と  
嘆  
ず  
る  
が  
お

了。